

# 2022年の回顧と新年の展望

## ～ 2022年の回顧 ～

### 国内景気～新型コロナウイルス感染症の影響が和らぎ、緩やかな回復基調で推移

2022年の国内景気を振り返りますと、年初はオミクロン株の急速な拡大を受けて、多くの地域でまん延防止等重点措置が適用されたことから、個人消費を中心に落ち込みがみられました。以降は、原材料や部品・部材の供給制約、資源価格の上昇、円安などの懸念材料がみられたものの、経済活動の正常化が進むもとで公的支援策の実施もあり、均すと緩やかな回復基調で推移しました。

項目別にみますと、個人消費は、年初のまん延防止等重点措置の適用に伴う行動制限の強化から一時大きく落ち込みました。春先以降は感染拡大防止と経済活動の両立が図られるなか、衣料品などの半耐久財や対面型サービス消費に改善の動きがみられましたが、家電などの耐久財、エネルギーや食料品などの非耐久財は販売価格上昇に伴う消費マインドの悪化を反映し、力強さを欠きました。

設備投資は、増加基調で推移しました。企業業績の改善に伴い機械投資が堅調に推移したほか、デジタル化や省力化、脱炭素関連など将来を見据えた投資意欲が高まりました。

生産は、年前半は、半導体等の部品不足や中国上海市のロックダウン（都市封鎖）に伴うサプライチェーン混乱の影響で一部に弱さがみられたものの、全体としては回復傾向で推移しました。年後半は、海外経済に減速感が窺われるなか、部品・部材の供給制約や在庫調整などもあり、回復のペースが鈍化しました。

### 県内景気

#### ～機械工業を中心に、回復基調をたどる

県内景気を振り返りますと、本県の主力産業である機械工業が総じて堅調に推移したほか、企業業績の好調さから設備投資も底堅く推移しました。また、新型コロナウイルス感染症の影響が和らぐなか、個人消費も対面型サービス消費を中心に改善の動きが強まるなど、回復基調をたどりました。

項目別にみますと、個人消費は、年初はオミクロン株の感染急拡大の影響で力強さを欠いたものの、春先以降は徐々に持ち直しに向かいました。巣ごもり消費に底堅さが窺われるなか食料品が堅調に推移したほか、これまで苦戦していた衣料品も外出機会の増加に伴い持ち直しました。一方、家電品は中国上海市のロックダウンの影響で欠品が生じるなど、一部に弱い動きがみられました。また、乗用車販売は、半導体不足などによる完成車メーカーの生産調整の影響で、前年を下回る水準で推移しました。

設備投資は、高稼働が続く機械工業を中心に生産能力増強投資が活発化したほか、宿泊施設や物流施設にも動きがみられるなど、回復基調で推移しました。ただし、年央以降は、資材価格の上昇などが重石となり回復のペースが鈍りました。

生産は、供給制約の影響で一部に弱い動きがみられましたが、半導体製造装置や工作機械、電子部品など幅広い品目で好調さが窺われた機械工業を中心に、総じて堅調に推移しました。世界的な設備投資需要の拡大は、半導体製造装置や工作機械などの産業が集積する山梨県にとって追い風となり、鉱工業生産指数は全国平均を大きく上回る水準で推移しました。ただし、秋口以降は、在庫調整などの影響もあり、やや一服感も窺われました。一方、宝飾、ワイン、ニット、織物などの地場産業は、国内市場の縮小や原材料価格の上昇など厳しい局面が続きましたが、感染症の影響が和らぐなか、人流の増加と消費マインドの上昇により、持ち直しの動きもみられました。

なお、観光関連をみますと、外国人観光客が見込めない一方、国内観光客は持ち直しの動きがみられました。感染拡大時に新たな行動制限が課せられなかったことや、「県民割」・「全国旅行支援」などの支援策も相俟って客足が回復し、宿泊施設の稼働率も高水準で推移しました。

## ～ 新年の展望 ～

### 国内景気

#### ～緩やかな回復基調をたどるが、海外経済の減速や物価上昇が懸念材料に

2023年の国内景気は、基本的な感染防止対策が維持されるもとで政府や自治体による政策支援や、インバウンド需要の持ち直しなどによる消費需要の拡大、雇用・所得環境の改善及び企業の設備投資の増加が下支えとなり、回復基調をたどるとみられます。ただし、海外経済の減速に伴う輸出の減少や物価上昇による消費マインドの悪化など、景気下振れリスクが顕在化すれば、回復のテンポが鈍る可能性が残ります。

項目別にみますと、個人消費は、経済活動の正常化や雇用・所得環境の改善に伴い持ち直していくとみられます。ただし、感染の再拡大や物価の上昇などは、消費マインドに大きな影響を与えることから、注意が必要です。

設備投資は、企業収益に底堅さが窺われる製造業、ウィズ/アフターコロナに向けた体制強化を進める非製造業ともに、堅調に推移すると考えられます。

生産は、為替が円安水準で推移するなか、米国、欧州向けを中心とした輸出の増加と内需の回復を背景に持ち直しが続くと予想されます。ただし、輸出の下振れから、減産を余儀なくされるリスクもあるため、注意が必要です。

#### 県内見通し～緩やかに持ち直すが、先行きには不透明感も

県内景気は、機械工業を中心に生産が堅調さを維持するなかで、企業収益や雇用・所得環境の改善を通して、設備投資や個人消費も持ち直していくことが見込

まれることから、緩やかに回復していくとみられます。ただし、感染症の再拡大や供給制約、資源価格の高騰、海外経済の減速が下押し圧力となる可能性があるため、先行きに対して不透明感の強い状況が続くと考えられます。

個人消費は、経済活動の正常化が進むなか、政府や自治体の需要喚起策が消費マインドの引き上げに資することから、持ち直しの動きが強まるとみられます。

設備投資も、回復基調で推移すると考えられます。機械工業で生産能力増強投資が増加していくことに加え、合理化・省力化投資も高まっていくことが予想されます。また、非製造業においても、人流の増加にともない、店舗や宿泊施設の新設、改装など投資意欲が強まっていくと考えられます。なお、「県内企業経営動向調査」（山梨中央銀行）の2022年度下期（22年10月～23年3月）の設備投資計画においても、実施予定率、投資額ともに前向きな姿勢が窺われます。

生産面について、機械工業は、半導体関連で在庫調整の動きが強まるなか、年前半はやや減速すると考えられますが、年後半には海外経済の回復や在庫調整の終了等に伴い、再び増勢に向かうと期待されます。一方、宝飾、ワイン、ニット、織物などの地場産業については、人口減少などにより国内市場が縮小するなか、機械工業と比べると厳しい状況が続くとみられます。ただし、ECサイトの活用強化など販売チャネルを拡充することで、需要を取り込むチャンスは広がっていくものと考えられます。

なお、観光関連をみると、政府の水際対策の緩和が進むなか、インバウンド需要の回復が見込まれ、コロナ禍前の賑わいを取り戻すことが期待されます。

## ～ 卯（ウサギ）の話 ～

2023年は、卯（兎）年です。兎（ウサギ）は、哺乳綱ウサギ目ウサギ科に属する総称です。日本では野生のノウサギも家畜やペットとして飼われているカイウサギも同じ「ウサギ」で特に区別されませんが、欧米では厳密に区別されています。なお、日本で飼われているウサギはどんなに外見が違っても「ヨーロッパアナウサギ」というひとつの種類のウサギです。

ノウサギは、1匹ずつで生活し、巣穴を作らず草むらなどで生活します。生まれたばかりの子は、毛が生えそろっていて、目も見開いています。一方、カイウサギは、地中に穴を掘って巣を作り、群れで生活します。生まれたばかりの子は、毛がなく、目は閉じており、耳も聞こえません。

日本でウサギがペットとして飼われるようになったのは、明治時代とってからです。明治維新後、西欧の文化が徐々に導入されるなか、ウサギをペットとして飼う文化が広がりました。その人気は瞬く間に広がり、ウサギの値段が高騰すると、ウサギの販売を商いとして行うものも現れました。こういった事態に対し、各地でウサギの売買を禁止する法令が出されるほどでした。なお、今の日本でおなじみの白い毛に赤い目のウサギ（日本白色種）は、この時代に品種改良により誕生しています。その後、昭和時代のはじめには、アンゴラ種という毛の長いウサギの人気が高まり、日本で飼われているウサギの中で最も数が多い品種となりました。この時期には各地で品評会が開催されていたようです。

ウサギの話としては、月にウサギが住んでいるという逸話が有名です。室町時代の「<sup>あいのうしやう</sup>塙囊鈔」によると、『菩薩行（世の中のすべての人々の救済を願い、平和の実現に向けて努力すること）に取り組むウサギが東方の守護神へのお供え物として、自分を差し出そうと自らを焼身してしまいました。東方の守護神は、こうしたウサギの慈悲深い菩薩行を未来の人々に知らせるため、その遺骨を月中に安置しました』とされています。これが月にウサギが住むようになったことを説く仏教上の説話となり、みなさんの知る逸話となっていたのではないのでしょうか。

わが国の卯年の歴史を振り返りますと、昭和金融恐慌(1927)、第二次世界大戦勃発(1939)、東京電力株式会社発足(1951)、名神高速道路開業(1963)、山陽新幹線、岡山一博多間開業(1975)、株式市場大暴落(ブラックマンデー)、(1987)、東海村 JCO 臨界事故(1999)、東日本大震災(2011)などの出来事がありました。

また、山梨県関連では、徳川義直甲斐国受封(1603)、全国調査をサンプルとし県下の人口調査を実施(甲斐国現在人別調べ)(1879)、郡制・県制施行(1891)、甲府市役所、相生町に新築(1915)、甲府駅前大火(1939)、富士吉田市制施行(1951)、県庁新庁舎落成(1963)、県民情報プラザオープン(1999)、恩師林御下賜 100 周年記念大会(2011)などの出来事がみられました。

なお、卯年生まれの名人としては、あだち充、天地真理、市原隼人、内田裕也、内田有紀、尾田栄一郎、川合俊一、工藤公康、河野太郎、コシノジュンコ、坂口憲二、五月みどり、滝廉太郎、竹中平蔵、辻希美、デイヴィッド・ロックフェラー、中村雅俊、長澤まさみ、夏目漱石、橋本環奈、正岡子規などがいます。

陰陽五行によると、2023年は「癸卯(みずのと・う)」にあたります。「癸」には、武器を交差させて立てかけたさまから戦闘をいったん中止する、原理原則に沿って一致協力して進めていく、という意味があります。また、「卯」は、万物が茂ること、という意味があります。このため、「癸卯」は、「諸問題が一区切りとなり、新たな時代がはじまる」、「基本に立ち返り、改めて一步を踏み出す」ということになりましょうか。

2022年は、3年目となった新型コロナウイルスとの戦いに加え、ロシアによるウクライナ侵攻などの世界の安全を脅かす事態が発生しました。癸卯の2023年は、「兎を見て犬を放つ」ように、こういった問題に適切な対策を講じ、「兎の登り坂」の如く、新しい時代をまい進する年としていきたいものです。

※兎を見て犬を放つ…手遅れに見えても、対策を講じれば間に合うこと

※兎の登り坂…物事が早く進むたとえ

※卯(ウサギ)の話は、はじめてのうさぎ(どうぶつ出版)、ウサギの日本文化史(世界思想社)、干支の漢字学(大修館書店)などから当社で作成

2022年12月  
山梨中銀経営コンサルティング株式会社